

# 言語生活

岩 淵 匡

一

言語生活が、言語と社会とのかわりを対象とする分野であるならば、語彙における、位相の問題や、社会言語学の研究もまた、おたがいに共通する部分をもつ。特に、社会言語学の研究は、国立国語研究所の調査研究活動により、国語学研究中に定着してきたとみてよい。これに呼応するような形で、言語生活の研究も、社会言語学的要素を加えながら、従前よりも一層のひろがりを見せてきているといえるだろう。しかし、ひろがると同時に、他の領域との関連も顕著となり、言語生活研究の中心は、ぼやけてしまいそうな感じさえする。これは、「言語生活」とは何か、という問題とも関連するものであり、この問題の解決ができれば、やはり中心はぼやけたままとなってしまふ。ここでは、ある程度、項目をしぼることによって、言語と社会との関連の中で、言語生活研究と考えられるものについて、展望してみたい。

## 二

言語生活研究において、その中心の課題は、戦後三十年間常に考

え続けられてきた、「言語生活」とは何かということである。この問題は、学界展望の範囲や分野をはっきりさせるためにも欠かすことができない。このために、従来から、学界展望（言語生活）の執筆者は、なんらかの形で、この問題にふれてこられたのだと思う。昭和五十三・五十四年をふりかえてみると、この根本の問題についての議論はほとんどなかったといえる。五十一・五十二年を展望された、渡辺友左氏のもの（『国語学』113・昭53・6）が、その中で唯一とでもいえるものである。渡辺氏は、五十一・五十二年に公刊された、時枝誠記者『言語生活論』（岩波書店、昭51・10）、樺島忠夫「言語生活とは何か」（『言語生活』300、昭51・9）、柴田武「日本人の言語生活」（『岩波講座日本語2 言語生活』、昭52・12）を中心に、時枝説を批判しながら、「言語生活」とは何かを明らかにされた。もちろん、学界展望として書かれたものであるから、その一部として示されたものであるが、明確な定義を試みておられる。

現在の言語生活研究は、必ずしも時枝説によるものではない。しかし、その影響は、今なお大きなものがあり、また、そこに、社会言語学的なもの加わり、新しい形の言語生活研究がはじまっ

る。これに伴い、「言語生活」の定義にも変化がでてこよう。

ところで、渡辺氏は、

「言語生活とは、人間があるまとまりとなる時間の枠組みの中で展開する言語活動の全体的複合のことである。」

とされた、前後の説明とともに読むと、用意周到な表現であることがわかる。たとえば、「あるまとまりとなる時間の枠組み」という表現は、従来あまりみられなかったものであり、言語生活研究が、現代だけでなく、過去のあらゆる時代に至るまで、行われるべきことをはっきりと主張されたものといつてよい。過去の言語生活については、従来からも考えられてはきているが、定義上は明確ではなかったといえる。

### 三

言語生活研究の対象についても、渡辺氏は、展望の中でふれておられる。しかし、ここでは私なりの考え方を示し、それによる展望を試みることにする。渡辺氏のような用意周到な表現ではないし、あいまいさも残ろうが、あえて私見を述べたい。まず、「言語生活」とは何かについては、

言語と社会との相互関係に基づき成立する言語活動を、総合的、体系的に把握する時、これを言語生活という。

というふうに定義されよう。ここでいう、言語とは、構成要素的なものではなく、総合的なものをさす。また、社会は、個人もしくは集団としてのさまざまな生活や文化を考えてよい。一方、言語活動の成立する条件については、すでに多くの学者達の指摘があるが、一応、次の四つをあげることができる。

イ、人に関するもの 表現者、受容者及び、それらの所属する

社会の言語的環境（集団、制度、習慣、生業、交通、技術など）

ロ、場面に關するもの 表現者、受容者、話題の三者の關係に

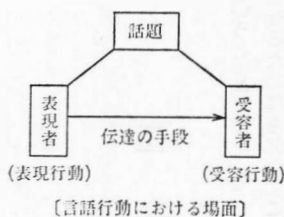
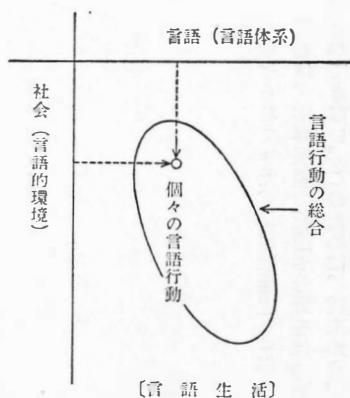
よって生ずる状況、雰囲気

ハ、伝達の手段・方法に關するもの 表現の意圖、形態及びそ

れらに適合する伝達のための手段

ニ、言語体系に關するもの 変種、接触など

以上のように考え、言語的事実にしほって言語生活を扱うならば言語行動（その種類と体系）及び、言語行動を成立させるための一条件として言語体系の二点となろう。もちろん言語的事実でないものを無視して言語行動を考えることはできないが、それらは、言語行動が成立するための諸要件としていずれば考察の対象とならうし、言語行動を知るためには、非言語行動との比較も必要とならう



くることは言うまでもない。なお、このほかに、時間的ひろがりによる問題、すなわち、言語生活史の問題も考えねばならない。

さて、以上を図示してみると、前ページ下段のようになろう。

#### 四

昭和五十三・五十四年の言語生活研究の一つの特徴は、戦後の研究をふりかえる材料が提供されたことである。時枝説については、昭和五十一年の『言語生活論』(岩波書店)によって、その展開をあとづけることができたが、国立国語研究所の研究活動や、社会言語学の導入による展開のあとづけについては示されなかった。ところが、五十三年十二月に、国立国語研究所開所三十周年を迎えるとともに、「言語生活研究の30年」(『言語生活』324、昭53・12)という、大石初太郎、柴田武、高橋太郎、築島謙三、野元菊雄の諸氏による座談会が行われた。論文ではないが、戦後はじまった新しい研究の展開と今後の展望を考えるのに示唆的である。また、柴田武著『社会言語学の課題』(三省堂、昭53・12)もでて、日本における社会言語学的发展をふりかえることが容易となった。『社会言語学の課題』は、既発表の論文を集めたもので六部からなり、言語生活研究、社会言語学研究に関する二十九編の論文をおさめる。今後の研究の出発点として、有益な文献となろう。これに、時枝誠記博士の一連の著作を加えることによって、新しい展開を期待するため、基本的文献が大方そろったことになる。

#### 言語生活

言語生活そのものというわけではないが、社会言語学に関して、野元菊雄「言語における社会と個人」(『言語生活』320、昭53・5)や、野元菊雄「社会言語学的調査」(『言語』、昭53・9)、渡辺

友左「言語社会学と社会言語学に対するわたしの立場」(『各地方言親族語彙の言語社会学的研究(Ⅰ)』、秀英出版、昭54・2)などがでて、社会言語学の必要性、方法について説かれている。言語生活研究から、社会言語学研究への大きな転換期を迎えた感がある。なお、社会言語学書の翻訳として、デル・ハイムズ著、唐須教光訳『ことばの民族誌——社会言語学の基礎』(紀伊国屋書店、昭54・10)がでた。理論や方法について、今後大きな影響を与えようである。

#### 五

言語生活研究の大きな柱は、前述した通り、言語行動と言語体系とであろう。社会言語学的研究の主流もこの二つに集中するようになっている。

言語行動についてみるならば、今後の研究の動向に大きな影響を与えると思われる、二つの文献が公刊された。一は、論文集であるが、林四郎著『言語行動の諸相』(明治書院、昭53・3)であり、一は、南不二男編『講座言語3 言語と行動』(大修館書店、昭54・11)である。前者は、林氏の原著、『言語表現の構造』(明治書院)とともに、著者の、言語行動論の一部をなす。ともに既発表の論文を中心にまとめられたものである。『言語行動の諸相』は、四部からなり、特に第一部は「言語行動に関する論」で、「人の死をめぐる言語行動」「言語表現の外側と内側」「言語表現と非言語表現とのかわり」「敬語行動のタイプ」「対人関係とことば」「敬語表現の原理」「敬語の構造」の七編の論文をおさめる。言語行動についての基礎的な問題を扱っており、今後の研究の出発点となるものである。

後者は、以下の九編をおさめ、現段階における言語行動研究を展

望し、今後のあり方を考察しようとしたものである。南不二男「言語行動研究の問題点」、ネウストプニー「言語行動のモデル」、林四郎「言語行動概観」、芳賀純「言語行動と心理」、比嘉正範「多言語社会における言語行動」、天野清「発達の面からみた言語行動」、木戸幸聖「精神障害と言語行動——分裂病を中心として——」、野元菊雄・

江川清「言語行動の分析」、杉戸清樹・沢木幹栄「言語行動の記述——賈い物行動における話しことばの諸側面——」。以上であるが、南、ネウストプニー、林、芳賀の四氏の論文は、言語行動論概論とでもいうべきもの、野元、江川、杉戸、沢木の諸氏の論文は、研究法、調査法について具体例をもとに説いたもの、比嘉、天野、木戸の三氏のもの、言語行動のうちで特定の問題について扱ったものである。概論書的な傾向をもつが、今後ますますさかんになると思われる言語行動研究について一つの方向を示すものとして、欠かすことのできない文献となろう。なお、国立国語研究所の報告や柴田武博士らの指導を受けた人々による報告には、言語行動についての具体的な調査結果が示されており、あわせみれば社会言語学的研究の方法は一層明らかになる。

言語行動に関して他に、言語表現に関するものとして、南不二男「言語表現における『空間的構造』と『時間的構造』」(『国語学』115、昭53・12)があり、また、敬語行動に関するものもいくつかみられる。雑誌『言語生活』は、「職場の敬語」(昭54・4)を特集し、また、雑誌『言語』も、「敬語とは何か」(昭54・6)を特集した。その中で具体的な問題を扱ったものとしては、杉戸清樹「職場敬語の一実態——日立製作所での調査から——」、藤岡克彦「住宅地での敬語行動」(以上、『言語生活』328、昭54・4)、井上史雄「若者の

敬語行動」(『言語』、昭54・6)などがある。また、敬語行動一般に関して、南不二男「階層差と待遇表現」(『言語生活』328、昭54・4)、柴田武「敬語と敬語研究」(『言語』、昭54・6)などがある。これらは、『言語と行動』では扱われていない問題であるので、相互に補足的な役割を果たすものといつてよいであろう。

このほか、渡辺友左氏が紹介しておられた(『国語学』113)、江川清、杉戸清樹、米田正人の三氏の報告をおさめた国立国語研究所の『研究報告集——I——』(秀英出版、昭53・5)も刊行された。

なお、哲学的なものであるが、言語行動に関する翻訳書も刊行されている。J・L・オースティン著、坂本百大訳『言語と行為』(大修館書店、昭53・7)である。また、David Holdcroft: *Words and Deeds: Problems in the Theory of Speech Acts*, Oxford University Press, 1978 が公刊されたこと(『言語』、昭54・6、「海外新著紹介」による)。

## 六

言語生活研究のもう一つの柱としての言語体系の研究は、接触到関する問題が中心である。中でも、比較的古くから取りあげられてきたのは、共通語化に関するものである。この期にもいくつかの論文が発表されているが、総合的なものとしては、小野米一「移住と言語変容」(『岩波講座日本語別巻 日本語研究の周辺』、昭53・3)がある。北海道における事例を中心に、北海道以外の国内各地への移住、国外への移住、諸外国の例についてもふれ、総合的に考察をし、二重言語生活の問題にまで言及している。日本人の言語生活の今後を考える上に、重要な問題を含むものだけに、今後さらに大規

模な調査や研究が進められていこう。特定の問題としてはアクセントについて、同様の問題を扱った、平山輝男「移住者二世の言語——特に無アクセント地域の場合——」(『国語学』111、昭53・9)などがあるが、特定の地域社会の問題を扱ったものと同様にいずれも方言の項で扱われようからここでは論文名を一二あげるにとどめておく。

言語接触に関するものとしては、翻訳の問題もある。従来、文化論としてとりあげられてきていたものであるが、言語生活の問題としても当然とりあげられなくてはならない。が、言語行動、言語接触の問題として扱われたものは殆どないように思われる。今後の問題というところであろう。なお、柳父章「翻訳の問題」(『岩波講座 日本語別巻 日本語研究の周辺』、昭53・3)だけをあげておく。

二言語使用の問題も、扱われる問題であるが、今期目については、外国人に対する日本語教育の問題である。先年、雑誌『言語生活』でも、特集をしていたが、今期は、雑誌『言語』が、「海外の日本語教育」(昭54・3)という特集をした。海外における日本語教育の現状をまとめたものである。また、主として、国内における日本語教育の現状と問題の所在についてまとめたものとして、水谷修「外国人に対する日本語教育」(『岩波講座 日本語別巻 日本語研究の周辺』、昭53・3)がある。この問題も、今後、ますます発展していくものと考えてよいであろう。

このほか、国語教育、国語政策の問題も、言語体系に関するものがあるが、ここでは省略する。

七

言語生活史に関するものとしては、佐藤喜代治、池上楨造両氏の

ものをあげることができよう。このほか、雑誌『言語生活』の特集「日本語のあけぼの」(昭54・2)や、ジャーナリズムをにぎわした鉄剣銘、また、古代史ブームとともに関心の高まってきた木簡に関する二三の書も、言語生活史に関するものとしてあげることができ。

佐藤喜代治「平安時代の言語生活——話すと聞くとの関係——」(『国語学』112、昭53・3)は、平安時代において、話し聞くということがどのように行われたかという事実を、社会の秩序、社会の倫理、社会の制度の三点からながめ、研究の問題をあきらかにしようとしたものである。言語生活史研究の対象や方法は、現代の言語生活を研究する以上に不明確なものであり、今後の研究のあり方の一例を示したものである。

池上楨造「識字層」(『岩波講座 日本語別巻 日本語研究の周辺』、昭53・3)は、主として江戸、明治の時代における文字使用の状況をさぐるものとして、文字史の範ちゅうでもあるが、やはり言語生活史の問題というべきである。どういう人々がどの程度の文字を理解し、またそれがどういふふうにな、聞く、話すに影響を及ぼすかについての考察であるが、文字使用に縁の薄い層のことまで考えての言語生活史研究は、非常に困難さをともなおう。今後考えていかなければならない問題であるが、資料とその方法には、さまざまな問題がでてこよう。また、現代の文字生活と音声生活の関係についてもかかわりのあるものであるだけに興味をもたれる分野である。

ところで、現在刊行中の、古田東朔編『小学読本便覧』(全十巻 別巻一、武蔵野書院)も、明治・大正・昭和期における言語生活、

特に、文字使用と話す、聞くとの関係を考えるための資料として有効なものとなる。先年刊行された『日本教科書大系』（講談社）とあわせ用いることにより、中世以来の、文字使用との関連における言語生活の実態の一端を知る資料となりえる。

雑誌『言語生活』（昭54・2）の特集「日本語のあけぼの」は、稲荷山古墳で発見された鉄剣銘の解読にあわせ企画されたものである。特集そのものは、言語生活史を意図したものではないが、益田勝実「神話の日本語」、藤堂明保「稲荷山古墳の剣銘の解読」、姜斗興「上代表記法の成立と渡来人の役割」など、古代言語生活史を考える上に示唆を与えられる。また、鉄剣にしるすこと自体、伝達の手段がどうであったのかを示す資料であり、これに呼応して生れた古代史ブームと、またそこから改めて脚光を浴びはじめた木簡への関心なども古代言語生活を考えていく好個の材料を提供してくれる。木簡については、毎年のように、歴史学の立場からの発言が続いているが、昭和五十四年にも、木簡研究の現状をふまえた単行本が刊行された。日本木簡と対比させながら、中国木簡について特に、内容についてまとめた大庭脩著『木簡』（学生社、昭54・3）、詳細な文献目録を付した、横田拓実、鬼頭清明著『古代史演習 木簡』（吉川弘文館、昭54・8）、多くの写真、釈文、木簡の内容、用途などを収めた、狩野久著『木簡』（『日本の美術』160、至文堂、昭54・9）である。伝達手段として、また、そこに書かれた文字は文字史の資料であるとともにさきの鉄剣銘とともに古代言語生活史を考える資料となるだけに、一読すべきものといつてよい。

## 八

言語生活研究の、昭和五十三・五十四年の状況をみると、今後、言語行動の研究へ、そして、社会言語学的調査による研究へと移行していくように思われる。その方向づけをするのが、『岩波講座日本語2 言語生活』（昭52・12）であり、同じシリーズの別巻『日本語研究の周辺』（昭53・3）、柴田武、林四郎の両氏の論文集、南不二男編『講座言語3 言語と行動』などである。国立国語研究所の調査研究報告も同様、今後の方向を示すものとなる。こうしてみると、社会言語学的研究による言語行動の研究が、現代の言語生活の究明を旨とし、今後一層盛んになっていくことは否定できない。

一方、その必要性が叫ばれて久しい、言語生活史研究は、佐藤喜代治「平安時代の言語生活」（『国語学』112、昭53・3）に、「その対象も方法も必ずしも明確ではない」と記されている通り、困難さが障害となり、低迷を続けると思われる。佐藤博士の前記論文や池上禎造「識字層」（『岩波講座日本語 別巻 日本語研究の周辺』、昭53・3）が言語生活史研究に一つの示唆を与えるものといえ、資料の収集、方法論を確立することの立ち遅れが、現在の状況をもたらしているといえよう。